

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

科学研究費助成事業 研究成果報告書



令和 2 年 7 月 9 日現在

機関番号：11201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16723

研究課題名（和文）絵画モチーフとしての風景画家 近世ヨーロッパにおける風景画の展開との関わりから

研究課題名（英文）A Study on the Motif of Landscape Painter: the Process of Development of Landscape Painting in Early Modern Europe

研究代表者

金沢 文緒（Kanazawa, Fumio）

岩手大学・教育学部・准教授

研究者番号：80606997

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000 円

研究成果の概要（和文）：近世ヨーロッパでは風景画が独立した絵画ジャンルとして確立したが、伝統的な美術理論に基づいた美術ヒエラルキーにおいて、風景画とその制作者である風景画家は低評価に甘んじていた。当時のこうした社会的状況は風景画家の芸術的ジレンマを引き起こし、近世における風景画の展開にも大きな影響を与えたと考えられる。本研究では、風景画の画中に頻繁に描かれた制作途中の姿の「風景画家」の絵画モチーフに注目し、従来の研究では看過されてきた風景画家の自己表象、画家としての自意識の問題について考察し、これを通して近世ヨーロッパにおける風景画の成立と発展の過程を再考した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、風景画研究において、人物像は前景の物語主題、あるいは風俗的場面との関わりで扱われてきたが、本研究は画中で独立する「風景画家」という絵画モチーフに注目する点に独自性があった。この絵画モチーフについては体系的な研究が行われておらず、モチーフの展開に関する考察は、風景画の成立過程を実証的に裏づけるための新たな材料となっただろう。さらに、このモチーフの風景画家の自己表象としての機能を指摘し、その歴史的背景を示したことで、近世ヨーロッパに共有されてきた伝統的美術理論における風景画の位置づけと、その制作者としての風景画家の自意識の問題を新たな視点から浮かび上がらせることができたと思う。

研究成果の概要（英文）：Landscape painting was established as an independent genre in early modern Europe. However, in the hierarchy of genres based on the traditional art theory, landscape painting and its creator had a lowly status. The present research project aimed to elucidate the context in which the landscape painters faced the artistic dilemma in such social environment during this period. For this purpose, the problem of self-representation and self-consciousness of landscape painters, greatly associated with their artistic dilemma, was analyzed through examination of the pictorial motif of “the landscape painter working outdoors”, often employed in the landscape paintings. The results have successfully clarified some important aspects in the process of development of landscape painting in early modern Europe.

研究分野：美術史

キーワード：風景画 自己表象 戸外制作 風景画家 自画像

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

1．研究開始当初の背景

申請者は近年、18 世紀のヴェネツィア景観画家ベルナルド・ベロットの美術史的分析を一つの軸としながら、複数の研究に取り組んできた（「ベルナルド・ベロットおよび 18 世紀ヴェネツィア景観画における絵画的源泉についての考察」（平成 19 年度日本学術振興会特別研究員(DC2)）、「18 世紀半ばのドレスデンにおけるイタリア絵画の受容について」（平成 23 年度日本学術振興会特別研究員(PD)）、「宮廷芸術の二重性 18 世紀ザクセン＝ポーランド同君連合における美術政策の研究」（平成 26 年度科学研究費補助金（研究活動スタート支援））。テーマは多岐にわたるが、これらの研究は一貫して、18 世紀半ばのヨーロッパの美術的動向を地域横断的な視点から浮かび上がらせ、伝統的な美術ヒエラルキーにおいて低評価を与えられてきた景観画家の視線を通して俯瞰的に捉え直す作業であったと言える。

その過程で、現実の景観を忠実に再現する景観画という絵画ジャンルを専門とする景観画家が、時に専門を離れ、空想の産物であるカプリッチョや理想的風景画、あるいは物語画といった、景観画より上位の絵画ジャンルに取り組んでいた実態が明らかになった。こうした取り組みが画家自身の創作の高尚化の作業であったことを示した申請者の研究成果を通して、当時、美術ヒエラルキーの底辺に位置づけられていた画家たちの間で、自身の評価の向上を目指そうとする、一種の芸術的ジレンマが共有されていたのではないかと、というさらなる問題意識を持つに至った。これを踏まえ、景観画の包含領域である風景画に研究対象を広げ、こうした芸術的ジレンマの起因として予想される、当時の風景画家の社会的立場を解明することを新たな研究課題として設定することとした。

さらに、本研究では、こうした風景画家の社会的立場についての問題を、彼らの制作した実作品と関連づけて論じることを重視した。従来、近世ヨーロッパの風景画においては、人物像は風景を彩るための「添景」として、副次的扱いを受けるに留まってきたが、風景画家の芸術的ジレンマの表出を作品に見出すとするならば、それは風景描写ではなく、前景に描写された点景人物であると考えられる。なぜなら風景画の高尚化の際の主要な手段となったのは前景人物であったからである。この点に着目し、研究の具体的方針を定めることとなった。

2．研究の目的

ヨーロッパにおいて、近世は風景画が独立した絵画ジャンルとして確立した時代である。しかしながらこの時代、伝統的な美術理論に基づいた美術ヒエラルキーにおいて、風景画とその制作者である風景画家は低評価に甘んじたことは事実であり、近世ヨーロッパにおける風景画の展開には、当時のこうした社会的状況、すなわち、風景画家が陥っていた芸術的ジレンマが大きく関与していたと考えられる。本研究はこの芸術的ジレンマの問題について、当時の風景画家の社会的立場と関連づけながら解明することを目的とする。

この課題にアプローチする手段として、本研究では、風景画の前景に描写された「制作途中の風景画家」の絵画モチーフに注目する。この絵画モチーフについては、近世ヨーロッパの風景画に頻繁に登場するにもかかわらず、その包括的な研究が過去に行われてこなかった。近年の風景画研究では、前景人物は物語主題解釈の一手段として扱われるのみであり、結果として、物語主題をもたない人物像は研究対象としては看過されてきたと言える。「制作途中の風景画家」はそうしたなかでも、前景場面から独立した存在として際立った絵画モチーフである。モチーフとして描かれる、風景の中で制作に励む人物は明らかに風景画家であり、顔貌が明瞭でない点景としての位置づけを保ちながらも、作品の制作者自身の姿の投影であったのではないかと、という仮説が立てられる。すなわち、このモチーフを風景画家の自己表象の範疇に位置づけて考察することとした。

近年、芸術家の自画像に関する研究は進展し、Steven Greenblatt, *Renaissance Self-fashioning*, Chicago, 1980 以降、「自己成型」という概念を基盤に、芸術家の社会的地位と関連づけながら芸術家の自意識を作品に見出す考察が続けられてきた。しかしながらその一方で、風景画家の自己表象については、彼らが人物描写を専門外としており、また、彼らの作品の主題が常に風景であることから、従来の自画像研究の対象となることはなかったと言える。近年の自画像研究においては、画家が当時置かれていた社会的立場と、画家の自意識の表出には密接な関連性があるという問題意識が共有されている。その立場をとるならば、近世ヨーロッパの風景画家の社会的立場と芸術的ジレンマの解明を目的とする本研究を、「制作途中の風景画家」の絵画モチーフに注目して考察を進めることは有効であると考えられる。

本研究は、申請者がこれまでにやってきた、18 世紀半ばのヨーロッパの美術的動向を、伝統的な美術ヒエラルキーにおいて低評価を与えられてきた画家の視線を通して俯瞰的に捉え直す作業に連なると言える。絵画モチーフの類型化は今後の美術史研究に基礎的な情報を提供することを目指すものであり、モチーフの起源とその導入意図に関する考察は、近年、風景描写の変遷に沿って解明されてきた近世ヨーロッパの風景画の成立過程を、実証的に裏づけ、あるいは一部修正するための新たな有効材料となるだろう。さらに、自画像研究の分野においても、風景画家の自画像研究の欠落を補い、新知見をもたらさうと考える。

3. 研究の方法

(1) 先行研究の調査

既に述べたとおり、「制作途中の風景画家」の絵画モチーフについては、過去に体系的な研究が実施されていない。本研究は近世ヨーロッパ(17, 18世紀)の風景画を主に扱うが、このモチーフの起源と近世に至るまでの変遷についても明らかにしていない。本研究では中世期に初出する地誌画における同種のモチーフ(地図制作者)に注目し、このモチーフが近世の風景画家のモチーフへ継承されていったと想定し、近世以前の地誌画の先行研究の調査から開始する。

(2) 絵画モチーフとしての「風景画家」の類型化

先行研究の調査と並行し、最初の作業として、モチーフが描かれた作例を網羅的に収集し、メディア、時代、地域、さらに、モチーフ以外の描写、そして、モチーフに見られる身振り、持物、描写される人数、署名の有無など、様々な角度から類型化し、考察のための基礎データを作成する。類型化に際しては、風景画が独立した絵画ジャンルとして成立する17世紀以前についても広く調査対象とした。17世紀以前にも風景描写自体は存在したのであり、「風景画家」のモチーフは存在したと推測される。その意味において、この絵画モチーフの分析は同時に、風景画の絵画ジャンルとしての成立過程を実証的に跡づける手段となりうる。

(3) 他の絵画ジャンルの画家による自画像との影響関係についての考察

「制作途中の風景画家」の絵画モチーフが、いわゆる顔貌の明瞭な一般的な自画像の登場とどのような関連性を持っていたのか、その発展に影響を与えたのではないかという仮定に基づき、風景画の一部としての点景モチーフではない、「風景画家の自画像」を考察する。作品数としてはごくわずかであると予想されるが、これらの作品においてどのような表現が選択されたのかを考察することで、同時代の他の絵画ジャンルの画家の自画像との影響関係が解明されると考える。

(4) 風景画家の社会的立場との関わりからの考察

絵画モチーフは、伝統的美術理論が強固に維持されていた芸術の中心地イタリアと、風景画が独立した絵画ジャンルとして成立した北方の間には、描写方法や導入頻度などに、地域的な格差があったのではないだろうか。両地域の接点として、ローマを旅行した17~18世紀の外国人風景画家の活動に特に注目し、風景描写の様式、パトロネージ、出版された主要な芸術理論や辞典における風景画の定義などの分析を通して、風景画家の自己表象の問題を考察する。その際、画中のモチーフに他者の視線、すなわち「見られる」という行為がどのように表象されるのか(制作途中の画家を見守る周囲の人物)を手がかりにしたい。

(5) 風景画家の「芸術的ジレンマ」の表象に関する考察

風景画家の「芸術的ジレンマ」の視覚的証左として、彼らが専門外の絵画ジャンルに取り組んだ作品の具体的な分析を通じて、芸術的ジレンマの実態調査を行う。画家としての社会的地位の向上を目指す、一種の作品戦略として位置づけることを目指す。

4. 研究成果

(1) 近世ヨーロッパの風景画家の作品研究の一環として、近世フランス美術に関する展覧会「フランス絵画の精華―大様式の形成と変容」の図録にて17, 18世紀のフランス風景画家(クロード・ロラン、ユベール・ロベール、フラゴナール等)に関する作品翻訳を行った。

(2) 風景画家の芸術的ジレンマの表出、すなわち、画家としての社会的地位の向上を目指した作例として、ベルナルド・ベロットの宮廷画家としての地位確保のための作品戦略についての考察を、『美術史』に論文投稿を行った(刊行中)。

(3) 「制作途中の風景画家」の完成形として位置づけることのできるベルナルド・ベロットの景観画を取り上げた招待講演を、フォーラム・ポーランド会議にて行った。また、その内容を踏まえた論文が会議報告書に収録された。

(4) さらに、啓蒙活動の一環として、「制作途中の風景画家」の完成形として位置づけることのできるベルナルド・ベロットの景観画について扱った解説が、啓蒙書としての『ポーランドの歴史を知るための55章』に収録される予定である(刊行中)。

(5) また、現在絵画モチーフと風景画家の自画像との関連についての論文を投稿準備中である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 金沢 文緒 | 4. 巻 12 |
| 2. 論文標題 イタリア人画家カナレットの見たワルシャワ 18世紀ポーランドの宮廷美術との関わり | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 キリスト教ヨーロッパにおけるポーランドの1050年 フォーラム・ポーランド2016年会議録 | 6. 最初と最後の頁 34-43 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 金沢 文緒 | 4. 巻 189 |
| 2. 論文標題 ベルナルド・ペロットの政治的寓意画に関する一考察—18世紀ポーランド＝ザクセン同君連合の宮廷芸術として— | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 美術史 | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 金沢 文緒 |
| 2. 発表標題 18世紀ザクセン＝ポーランド同君連合期のポーランド宮廷における政治表象 |
| 3. 学会等名 第25回東西合同ポーランド史研究者集会 |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 金沢 文緒 |
| 2. 発表標題 イタリア人画家カナレットの見たワルシャワ 18世紀ポーランドの宮廷美術との関わり |
| 3. 学会等名 2016年度フォーラム・ポーランド会議（招待講演） |
| 4. 発表年 2016年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|-----------------------------|----------------|
| 1．著者名 大野芳材他 | 4．発行年 2019年 |
| 2．出版社 東京富士美術館 | 5．総ページ数 360 |
| 3．書名 フランス絵画の精華－大様式の形成と変容 | |

| | |
|---------------------------|----------------|
| 1．著者名 渡辺克義編 | 4．発行年 2020年 |
| 2．出版社 明石書店 | 5．総ページ数 印刷中 |
| 3．書名 ポーランドの歴史を知るための55章 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|